

旅人をもてなすことを忘れてはいけません。

そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。

(ヘブライ人への手紙 13章2節)

7月14日、本校の姉妹校である米国インディアナ州カーメル校より生徒と教員の使節団が5年ぶりに来校されました。毎年、交互に学校訪問することにして、1988年より始まったこの交流は、一人一家族でホームステイをし、生涯に渡る深い関係が数えきれないほど育まれ、素晴らしい時を刻んできました。そして、交流の輪は清教学園PTAによる姉妹校カーメル中学、高校への親善訪問、やがて河内長野市もカーメル市と姉妹都市提携を結ぶという、地域社会へも広がりを見せました。

今日に至る長い歴史の中で、多くのエピソードがありますが、とりわけ1990年3月の訪問での一つのエピソードを中山昇『みおつくしー若き日にあなたのつくり主をおぼえよー』[1995年]より「11月旅」掲載文から紹介いたします。

ちょうどその年の年明けから2月にかけては湾岸戦争で国際情勢は極めて緊迫していました。前年のイラクのクウェート侵攻は、度々の国連の撤退勧告にも関わらず、それが無視されていました。そこで年が開けるやアメリカを主軸とする連合国のイラク攻撃が布告されて、ブッシュ大統領は強硬にこれを押しすすめました。その戦時体制の中のアメリカへ出かけてゆくのは無謀ではないかというわけです。戦争の当事国へ中高生30人も連れて出かけて、もしも不測の事態に巻き込まれたらどうするかということでありました。

2月28日保護者の参集を願って、意見を聞きました。やっとフセインが国連の停戦勧告を受け入れると言いだしたという、その日です。こんな時でなければ経験できないこともあるだろうから連れて行ってやってくれるようにという90%の親の意を受けて、決行する決心をいたしました。ただ、この決心はやはり、神様が私たちの祈りをききとどけて下さるという信仰をかけてのものであります。

人知のはかり知れぬこと、よかれと思ってなしたことで結果は逆になることもあります。人間としてできることは不測の出来事が起きた場合は、全知全力で最後の1人まで守り通すこと以上にはできないのです。それを覚悟で生徒をあずかるのです。

海外留学は華やかな渡米ではなく、常に危険が隣り合わせであった状況がよく伝わってきます。一人ひとりの命を預かる責任が如何に重いものなのかを痛感するばかりです。しかし、この度の交流でもごく自然に、ごく当たり前に、カーメル生と清教ホスト生が肩を並べて、楽しそうにしらかしの径を歩いている様子を垣間見ると、とても微笑ましく、どのような試練に見舞われても乗り越える道を備えてくださる神様のご計画を信じ全てをお委ねして、今後の学園の歩みの中で国際交流は続けていかなければならないと心の底から思います。



カーメル中高から来校した生徒たちにお渡しした修了証